

新・農業経営者ルポ／第123回

不屈の夫妻
～飛ぶ夫、受ける妻～





有限会社降矢農園　福島県郡山市

代表取締役　**降矢敏朗**

取締役　**降矢セツ子**

ふるや・としろう（1951年、福島県郡山市生まれ）
ふるや・せつこ（1953年、同）
1973年に結婚し、82年に創業する。㈲降矢農園の設立は翌83年になる。現在、水耕栽培でカイワレダイコンやむらさき小町（ダイコンのスプラウト）、豆苗、サンチュ、夏イチゴの生産・販売に加え、放牧豚の加工品販売などを手がける。

これほど多くの不運に見舞われた農業経営者はいるだろうか。福島県郡山市の㈲降矢農園は1983年、カイワレダイコンの生産から始めた。順風満帆のさなか、O-157騒動に巻き込まれるも立て直す。2011年に福島原発事故、今年2月には豪雪被害と次々と災難に遭った。だが、代表取締役の降矢敏朗と妻で取締役のセツ子から悲壮感は伝わってこない。むしろ、次のステップに対する期待で一杯だった。

文／昆吉則、文・写真／平井ゆか

東北新幹線の郡山駅から太平洋側に向かって車で20分、阿武隈山系の中山間に人口わずか314人という川曲集落がある。この集落の山沿いに降矢農園はハウスと豚の放牧場、事務所を構えている。集落に入ると人通りの少ない山村ならではの静けさを感じた。

しかし、その静寂は農園とは無縁だ。ひとたび事務所に入るとにぎやかさに驚かされる。降矢夫妻と従業員たちの威勢の良い声や、「来ました」「どうも」とひっきりなしに訪れる客の声が飛び交っていた。

「うちは客が多いって言われるのよ」

セツ子は来客たちの世話を焼きながらそう話す。人が集まる会社の様子から夫妻の人柄がうかがえる。

現在、カイワレダイコンとむらさき小町、豆苗をはじめとするスプラウト、サンチュ、夏イチゴの生産、放牧養豚とその加工品販売を手がける。出荷先は、南東北三県の宮城、山形、福島で、地元を中心に事業を展開している。

これまで数々の不運に見舞われてきた。施設栽培の失敗、カイワレダイコンのO-157騒動、福島原発事故、そして今年2月の豪雪によるハウス倒壊だ。

「この辺りじゃ、うちは3回ぐらいつぶれたと思われてるよ。あっはっは」

敏朗はそう笑い飛ばす。

「結構、私たちってうまくいくのよ」

セツ子の言葉に敏朗もうなずき、声をそろえて言った。

「なんとかなる」

だが、想像を超える苦労を重ねてきたことは察しがつく。苦難を乗り越える力の源はどこにあるのか。

「男がロマンに走れるだけの余力を女の人が作ってあげるのがいいと思う。夫はこっちに行っていいかって、私に方向確認してるの」

セツ子の言葉からもわかるように、敏朗は見て確かめる前に新しいことを始める〝飛ぶ人〟だ。あちこち飛び回ってはアイデアを持ち帰り、セツ子がその話を聞いては共に楽しんで新たなことを実現する。この関係こそが不屈の経営を続ける力の源だといえるだろう。では、そんな2人がたどってきた力強い軌跡に迫りたい。

借金を抱えてカイワレを作る

敏朗がカイワレダイコンの生産を始めたのは82年のことになる。2年前、ヨーロッパに行ったのがきっかけだった。

それまで降矢家は集落の伝統的な農業を営んでいた。当時、養蚕とその餌になる桑、葉タバコ、コメの生産と牛の繁殖との複合経営が多く、降矢家も同様の経営をしていた。幼いころから家業を手伝っていた敏朗にとって、家業を継ぐのはなんの違和感もなかったという。中学校を卒業すると福島県の実習農場で1年間農業を学び、以後、父親の下で農作業に励んだ。

敏朗が経営者としての素質を持っていたことは、就農当初から詳細に労働日誌をつけるという行動に表れている。それによって敏朗は自分の労働効率を把握し、その後の経営の





1阿武隈山系の中山間にある川曲集落の田園風景
2降矢農園の事務所

不屈の夫妻 ～飛ぶ夫、受ける妻～

基礎を築いた。

「春と晩秋に蚕のまゆを取り、夏場は葉タバコを収穫する。合間に牛やコメの作業が入る。15分を1単位として、4分野の作業にどのぐらいの時間をかけているか記録していた。それがその後の経営の原価計算に役立った。葉タバコと蚕のピークだった72年ごろ、1000万円の売上があっても、時給360円ぐらいだとわかった。当時、土木作業が時給600円の時代だったので、このままじゃいけないと思った」

80年、敏朗はドイツやデンマーク、スイスに農業視察へ行った。そこで、これからの時代はハウスだとの考えに行き着く。

帰国後、経営の転換を後押ししてくれる人々に出会う。その年、郡山の農業を支援していた武田邦太郎氏が主催する若手農業者のための「あぶくま農学校」に参加し、経営学に触れた。また、翌年にはバイオテクノロジー専門の軽部征夫氏などを講師とした日本能率協会の勉強会に出席し、原価計算や発想の転換を学ぶ。こうして経営者としての力を磨いていった。

「彼らは経営の考え方を教えてくれた。蚕を毎日ふ化させれば作業が均一化されるだろう、桑の葉を冷凍保存したら1年中まゆを生産できるだろう、牛を妊娠させる作業は一度にできるだろうと。そういった考え方が後々、私のカイワレの経営につながった。あの経験がなかったら、いまの自分はなかっただろうな」

82年、敏朗はハウスで栽培するカイワレダイコンに目をつける。父親の反対を押し切り、借金をして設備を導入した。しかし、蛍光灯と空調による温度管理で栽培したカイワレダイコンは売り先で棚持ちがしなかった。そのうえ、落雷でハウスの電気系統が壊れてしまう。栽培を始めた翌月には早くも見切りをつけた。



3 カイワレ訴訟 国の敗訴確定

最高裁、上告退ける決定

賠償総額は2200万円

情報開示 国に教訓残す

3「カイワレ訴訟」最高裁勝訴の報道（日本経済新聞、2004年12月15日）

「見事に失敗。3000万円の借金が残った」

結婚9年目を迎えていた妻・セツ子はどれほどショックを受けたことか。だが、そのときにセツ子が夫にかけた言葉は、夫の気持ちを軽くし、次の行動に向かわせるものだった。

「あんたは一生かけて借金を返しなさい。家計は私が自分で稼ぐからいいよ」

妻の言葉を受け、敏朗はまたすぐに飛んだ。東京の神田市場で見つけたカイワレダイコンのパッケージの住所を頼りに、あるハウス農家をアポなしで訪ねる。

「そこで成功しているのを見て、その年のうちにハウスを2棟建てた。投資は6000万円だった」

つまり、数カ月の間に9000万円の借金を抱えたことになる。いま思うと馬鹿なことをやったと話す敏朗だが、採算の見通しがなかったわけではない。先の学校で学んだ経営学を活かし、単価、原価、利益を緻密に計算した。それを親戚に説明し、資金調達する。

それから同年12月26日の初出荷を皮切りに快進撃が始まった。主要産地の静岡県の同面積に対して150％の収穫高で、翌83年の春までに売上は1億円に上った。同年3月、降矢農園を設立し、ハウスを1000㎡に増設した。

O-157を乗り越え、3本の柱へ

ピーク時、カイワレダイコンだけで栽培面積が約3000㎡、売上は4億円だった。従業員も45人を抱えるまでになっていた。96年、カイワレダイコンの単価は落ち着いてきたが、それでも3億5000万円の売上があった。

そこに突如として大きな不運が訪れる。学校給食で起きた食中毒に端を発するO-157騒動に巻き込まれたのだ。当時、原因はカイワレダイコンに使用されていた水にあるとされ、風評被害に遭うことになる。

「忘れもしない、96年8月7日。その日の朝、取引先から電話が入った。11時にカイワレダイコンが原因だと発表されると。その日の夕方にはすべて店頭から撤去された」

売上は一ケタ下がって3700万円まで落ちた。従業員は身内と近所の人たち10人だけを残すことにし、他の従業員には給料を3カ月間支払いながら仕事を探してもらったり、知り合いに頼んで雇ってもらったりした。取引先は信用して支払いを待ってくれた。ただ、なかには即時の支払いを迫ってきた取引先もあり、苦しい経営が続いた。同年10月、

国を相手に争った損害賠償をめぐる裁判では敗訴に終わった。

「俺はそんなに危ないものを作ってきたのか」

そんな思いを胸にカイワレダイコンの汚名を晴らすため、18社1団体の計19人の原告団の1人として戦った。騒動から8年以上経った04年12月14日、ついに最高裁で勝訴する。敏朗は、当時の資金繰りの苦労を振り返る。

「自転車操業でね。どうやって生き延びてきたのか。ただ夢中だった」

セツ子は、この不運を驚くほど前向きに捉える。

「あれは起こるべくして起こったんだと思うの。あんなに仕事がうまくいってる状態は、続かないような気がしてた。もしあれがなかったら、後で確実にこけたよね」

この言葉に敏朗もうなずく。

敏朗は、O-157騒動の経験から、カイワレダイコン1本の経営を翌年、カイワレダイコン、豆苗、サンチュの3本柱に移行させた。また、自社製品のための配送部門を拡大して物流会社として独立させた。

そんな迅速な対応ができた理由について夫妻は、偶然でタイミングが良かっただけと話すが、その背景には会社設立2年目から続けていた試行錯誤があった。セツ子の大きな器をバックに、敏朗が外で新しい品目を見つけ、夫妻は話し合っては試作を繰り返してきたのだ。

カイワレダイコンが軌道に乗ってきた85年、敏朗はアスパラガスに興味を持つ。

「カイワレの利益は全部、土地利用型の資金にしたのよ。カイワレは私に任せて、夫は夢を追いたかったのよ。トラクターに乗りたくて」

ふと、当時の不満を思い出した妻に、敏朗は少し照れくさそうに反論する。

「当時、アスパラガスは3本で300円の時代だった。オーストラリアで収穫したアスパラガスが翌朝には神田市場に届いてる。そんな遠くから運んでペイできるならいけると思った」

北海道からアスパラガスの株を購入して始めたものの、2年で手を引く。北海道と郡山との生育期間が異なることから経費がかかること、期待していた2Lサイズが収穫できなかったこと、粘土質の土壌では根が思ったより伸びなかったこと、輸入に押されると考えたことが理由だった。

93年、今度は加工用ジャガイモの生産を始める。しかし、基盤整備で表土を削り取った土地だったため、ポテトハーベスターで収穫すると、ジャガイモなのか石なのかわからないほど石が上がってきた。また、粘土質の土壌はジャガイモの栽培に向かず、1年で撤退した。

一方、ハウスでも次々と新しい水耕栽培の品目に着手していた。

「新しいものは5年で柱になるかどうか見極めた。うちが品目を選ぶ基準は大手が参入しにくいもの。収穫に機械を使えない、つまり、人手がかかるものです」

そうして91年に始めたのがサンチュと豆苗だった。敏朗は、原価計算の考え方についてサンチュを例に話してくれた。

「サンチュは、大きく育てるとたくさんの葉が得られる。しかし、1本から何枚も採る作業は従業員に迷いが生じ、作業の手を止めさせる。その時間は人件費としてコスト上昇になる。そこで、1本から1枚採るという収穫方法にすることによって、誰でもすばやく作業できるようにしたところ、低コスト化につながった」

それ以外にも、ヒマワリやブロッコリーなどのスプラウトも試したが、棚持ちの悪さなどから3本柱には加えなかった。

また、現在、市場が拡大しているベビーリーフにもいち早く取り組んだ。

「ベビーリーフは早すぎたな」

「宅配で送るような時代だったもの。この人の場合、早すぎたっていうのがいくつもある」

「いいものがあるとすぐ見にいって始めてしまう。ただ、ベビーリーフは作れど作れど色がつかなかった」

「サンチュのハウスはUVカットだからね。でも、私たちはわからなかったのよ。はっはっは」

こうして作物の選択は時代とともに試行錯誤を繰り返していった。

物流事業も手がけだす。きっかけは、カイワレダイコンが配送中にダメージを受けて市場での評価が下がってしまったことだ。敏朗はそれなら自社便で配送したいと考えると、セツ子も賛成した。

「どこかの講演会で、『物流を制する者は業界を制するって聞いたからやる』って言うんで、『いいんでないの』って言いました」

この物流が結果的にO-157騒動直後の窮地を助けた。以降、夫妻の力の相乗効果はさらに高まっていった。

震災を乗り越え、放牧養豚を成功へ

経営が回復してきた09年、敏朗はハウスの近くの耕作放棄地で放牧養豚を始める。現在、レストランに精肉と生ハムを販売し、ソーセージなどの加工品を通販などで販売している。生後75日の子豚を買って放牧し、

不屈の夫妻 ～飛ぶ夫、受ける妻～

8カ月で出荷する。屠殺や加工は外部委託している。

放牧養豚もまた、夫妻にとってまったく経験のない初めての試みだった。セツ子は「人の話なんか、聞く気がない人だもの」と敏朗の顔を見る。

「聞く必要ないもん」

「やって失敗しないとわからない人だから」

「名人の話を聞いても、やってみないと結果はわからないから」

始めたころのことを思い出したのか、2人はくすくす笑い、セツ子が当時の様子を語った。



4



5

4放牧されている豚
5ハウス栽培の野菜の残さ物を食べる

「初めて子豚が運ばれてきたとき、トラックから降りるのを怖がるのよ。しょうがないから抱いて降ろしたんだから。知らないとなんでもやっちゃうのね。柵に頭を突っ込んで抜けなくなって、洗剤をつけて抜いたこともあるの」

「スコーンと抜けたっけな」

当初は不慣れだったものの、肉の品質には自信を見せる。日本調理学校に分析してもらったところ、学校が用意した放牧豚ではない生肉に比べ降矢農園の放牧豚の冷凍肉のほうがアミノ酸がずっと豊富だということがわかったという。また、病気にかかりにくく、実際、風邪を引いた豚が数頭いたに過ぎない。

敏朗は、その理由を土壌に含まれるミネラルを摂取しているためだと考えている。ハウス栽培の野菜の残さ、穀物などの濃厚飼料も餌として与えているが、耕作放棄地で放牧しているため、豚は野生の草木を食べている。草木の根まで掘り起こして食べることから、土壌のミネラルを摂取しているのだろうという。

初めは素人だった敏朗も、いまでは放牧養豚のコツを押さえている。一つは、子豚には初めに濃厚飼料を与えず、野生の草木だけを与えることだ。すると、土に慣れて耕作放棄地の雑草処理に活躍してくれる。同時に、ミネラルの摂取もできるようになる。もう一つは、柵として使用している電牧を覚えさせることだ。一度触れると近寄らなくなるため、放牧場から外に出ることはなく、山沿いの耕作放棄地の一角でも放牧できる。

こうして試行錯誤で放牧養豚に慣れ、ようやく初出荷を目前に控えたとき、またもや不運に見舞われる。

「O-157騒動の後、やっと2億円近くまで売上が回復したときだった。今度は東日本大震災の原発事故が起きました」

さすがの敏朗も顔を曇らせる。震災直後から風評被害に至るまでの経緯を次のように説明した。

「原発の水素爆発後の15日には従業員を自宅待機させた。物流事業用のトラックは、郡山の人たちをはじめ、福島県内の避難所へ食料を運ぶための緊急車両として使った。12日には生産物すべての出荷を止めた。悪い予想は当たり、主力のスプラウト類、サンチュ、豚、新たに始めたばかりのミョウガは福島県産というだけで出荷できなかった。カイワレダイコンや豆苗などのスプラウト類は一時、盛り返したが、その年の7月に他県の食品から放射能が検出されたのを機に、福島県産はついにまったく市場に受け入れてもらえなくなった。軌道に乗りつつあったミョウガは出荷先がすべて県外だったため、全量出荷停止となった。サンチュは、取引先の指示で放射能を計測した。最も多いときで一ケタ台の放射線量（Bq）が検出されたが、問題ないレベルだったため、不幸中の幸いでサンチュだけは出荷することができた」

降矢農園のある川曲集落は、原発の場所から距離的には近いが、風向きのせいか空間線量が低いエリアだという。敏朗は線量計を手に実際に測って見せた。

「空間線量は現在、0・05Bq。放

射線量は、山の中が高いわけではなく、どこに雨が降ったかによる。いままで一番高いときで0・25Bqだった」

夫妻にとっても意外だったのは、放牧していた豚からも放射線量が検出されなかったことだ。福島県が9月に血液検査まで行なったが、検出されなかったという。それ以前に屠畜場で検査したときも6Bqにとどまっていた。夫妻によると、放射線は摂取しても体外に排出されるため、毎日摂取しないと蓄積されないのだという。

放牧養豚の豚はその後、順調に出荷している。精肉は、放牧養豚の肉質の良さを認めてくれたレストランに出荷し、ソーセージなどの加工品は一般販売している。

震災の打撃も収まらないなか、敏朗はなおも飛び回る。今度は、付加価値のある豚肉加工品を作ろうと思い立ったのだ。これまでソーセージの原料にしていたもも肉を生ハムに加工して販売しようと考えたのだという。想定する出荷先はイタリアンレストランやスペインバルだ。白神山地の酵母菌を使用した生ハム製造業者を見つけ、そこに試作を依頼した。生ハムができるまでたっぷり1年かかってしまうが、満足いくものができたという。

全量出荷停止となったミョウガからは手を引き、今度は四国で見つけたイチゴを始めた。この時期に切り替えたことは、この1～2年の燃料費上昇を考えると結果的には良かった、とまたも夫妻は前向きだ。

ここでまたも不運が起きた。このイチゴのハウスも今年2月、豪雪でつぶれてしまったのだ。しかし、すでに6月に納品されたハウスで栽培を再開している。

村の再生へ

震災を経て、さらに不屈の夫妻の力が強まっているようだ。セツ子には実は、夫が持ち込む新しいことを一緒にやるかどうかの判断基準があるという。

「それおもしろいね、もうかるね、というのはあるけど、もうかるからやりたいわけじゃなくて、もうかんなくてもこれは意義があるね、ということをやりたいわけ」

夫妻は現在、放牧養豚のさらなる飛躍を目指している。もともと放牧養豚を始めたのは会社の事業のためだけではない。

「30年間、ずっとハウスの中にいたけど、7～8年前にふと村を省みたら、耕作放棄地が増え、村が荒れていた」

かつて桑畑や葉タバコが栽培されていた土地は、桑が成長して大木となり、竹と雑草が生い茂っていた。人口は少子高齢化と過疎化で減っていき、震災がさらに人口減少に追い打ちをかけた。

敏朗は、そんな村の状況に危機感を抱いていた仲間数人とともに村の整備活動を始めた。竹炭を焼いてホタルの生息する川の浄化をしたり、花壇を作ったりした。その活動の一つが放牧養豚である。当初、「山口方式」という耕作放棄地に牛を放牧する方法を取り入れたが、牛は食べる雑草に好き嫌いがあったため、今度は豚を飼い始めた。すると、豚は好き嫌いなく、草木の根まですっかり食べ尽くしてくれた。

夫妻はいまや、放牧養豚が耕作放棄地を活かすことを確信している。

今年、敏朗は、本誌が主催する農村経営研究会の会員になり、そこでカルビーの元社長である松尾雅彦氏に出会う。

「自分たちの村をどんな姿にしたいのか、30年後のビジョンを描きなさい。コメが供給過剰である現在、日本に輸入されている農産物を国内で作るのがいい。川曲集落のような中山間地で放牧養豚を行なっているのは正解だと思う」

この松尾氏の言葉を受け、夫妻は放牧養豚を軸に村の再生への道を歩み出している。

敏朗は現在、放牧養豚の餌の一つに、本誌が推進している飼料用子実トウモロコシを投入しようと考えている。トウモロコシの収穫機と放射線量を懸念していたが、研究会への参加を通じて、まず収穫機が不要だということに気づいた。草の根まで食べてしまう豚なら収穫せずに圃場に豚を放し、そのままトウモロコシを食べさせられる。また、本誌の調べでは、放射線量が400Bq以上ある土壌で栽培したトウモロコシが子実では2・8Bq以下、茎葉でも10・6Bq以下であることがわかっている。これらの情報を得た敏朗は、早くも来年からトウモロコシを生産しようと考えている。さらに発想を広げる敏朗は、国産の汎用コンバインが入れる圃場のない川曲集落を飛び出し、平場でそれを行なって放牧しようと思うに至った。

「放牧養豚の方法をパッケージ化して広めたい」

そう言って敏朗は将来を見据える。セツ子もまた次のように語った。

「うちも30年やってきたけど、これからどんな意味を持ってやるのか考えると、村のみんなが退職してから動けなくなるまでの職場づくりをしなくちゃいけないと思うわけよ」

村の再生のため、敏朗と共にセツ子も飛んでいる。（文中敬称略）